第2講座　指示語の内容をとらえる

⊙読解のポイント

指示語になるのは主として代名詞・副詞などで、ふつうは直前または直後の語を指すが、修飾語を含む語句や主語・述語の整った文を受けることも多い。また、原文には直接出ていない内容を暗示することもある。いずれにしても文脈をよくさぐって、その指示語の文中での役割（主語・述語・修飾語・独立語など）を判断し、それに応じる指示内容を考える。それをおさえたら、逆に指示語に代入し、すんなり文意が通じるかどうか、必ず確かめてみよう。

基本演習　**次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。**

それ世の中にある人、ことわざしげき振舞につけて、高き賤しき品をわかず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに、今何となく聞き見るところの昔今の物語をたねとして、よろづの言の葉の中より、いささか①その二つの跡を取りて、②よき方をばこれをすすめ、③あしきすぢをば④これを誡めつつ、いまだ⑤此道を学びしらざらん少年のたぐひをして、心をつくる便と成さしめんがために、試みに十段の篇を分かちて、十訓抄と名づく。其の詞、和字をさきとして、必ずしも筆のつひえをかがみず。見るもの目安からん事をおもふ故也。其の例、漢家をついでとして、広く文の道を訪はず。聞くもの耳近からん事をおもふ故也。但し、つたなき身を顧みるに、芸なく能かけたり。かかるにつけては、もしほ草かきあやまれる言の葉も数つもり、梓弓引きみん人のあざけりもはづれがたく覚えながら、志のゆくところ、ただにはいかがやまんとてならし。これによりて、建長四とせの冬、神無月の半ばのころ、おのづから暇のあき、心閑かなる折節にあたりつつ、草の庵を東山のふもとにしめて、蓮の台を西土の雲にのぞむ翁、念仏のひまに、⑥これをしるし終はること、しかりとなんいへる。

（十訓抄）

基本確認演習

文学史

1　次の文の□にあてはまるものを、あとの**ア**～**ト**から選び、（　）に記号で答えよ。

中世は、新旧文化の交替期であり、伝統的な和歌物語の類は、時代を下るに従って衰退して、新形態の文学が新しく起こった。和歌は、鎌倉期初めの①時代に頂点に達し、その後は衰退に向かい、室町期の新続古今和歌集を最後として勅撰集はたえた。一方、和歌に代わって多数の人々の連作になる②がおこり、武士僧侶を中心として庶民の間に流行した。伝統的な③・歴史物語・随筆・紀行などは、鎌倉期から室町期の初めに至る間に盛んに現われたが、何れも世相を反映し、時代思想を宿している。殊に時代の傾向をよく示しているのは、歴史物語から転生した④である。それは戦争を背景とする悲壮な人生を写すと共に、伝統的な情趣主義と⑤と武士的精神の交錯した、さまざまな情緒を描いている点に、文学的価値が認められる。

〈注〉　高き賤しき品――高貴な身分。下賤な身分。　しかるに――そうであるとき（現状）において。　心をつくる便――注意をする手引き・手がかり。　和字――仮名文字。　文の道を訪はず――書物で調べることをしない。　草の庵――そまつないおり。

1　――線①「その二つ」とは具体的に何をいうのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　高い身分の人がしたことと低い身分の人がしたこと
イ　賢い人がしたことと愚かな人がしたこと
ウ　昔の物語と今の物語
エ　日本および中国の書物に書かれていること
オ　世間の人の成功したことと失敗したこと

2　――線②「よき方」、③「あしきすぢ」はそれぞれ文章中では具体的に何をいうのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

②　**ア**　高　**イ**　賢　**ウ**　得　**エ**　昔　**オ**　和
③　**ア**　賤　**イ**　愚　**ウ**　失　**エ**　今　**オ**　漢

3　――線④・⑥の「これ」はそれぞれ何を指すのか。文章中より抜き出して書け。

④〔　　〕　⑥〔　　〕

4　――線⑤「此道」とは具体的に何をいうのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　どのようにして多くの仕事をするかという方法
イ　どのようにして出世しようかという方法
ウ　どのようにして昔今の物語をたねとしようかという方法
エ　どのようにして良い方をすすめ、悪い方を誡めるかという方法
オ　どのようにして世間をわたっていくかという方法

室町期は⑥の風潮が盛んに起こった時代であって、文学の方面にも著しい新陳代謝が行われた。その著しいものは連歌から派生した⑦、通俗短編小説の⑧などである。しかし、後期の新興文学を真に代表するものは、従来の音楽・舞技・文学を綜合集成した⑨と平民劇の⑩である。

ア　古今集　**イ**　金槐集　**ウ**　連歌
エ　今様　**オ**　擬古物語　**カ**　歌物語
キ　新古今集　**ク**　新体詩　**ケ**　俳諧之連歌
コ　軍記物語　**サ**　仮名草子　**シ**　出家遁世
ス　能　**セ**　無名草子　**ソ**　歌舞伎
タ　下剋上　**チ**　狂言　**ツ**　御伽草子
テ　無常観　**ト**　平曲

①（　　）　②（　　）　③（　　）
④（　　）　⑤（　　）　⑥（　　）
⑦（　　）　⑧（　　）　⑨（　　）
⑩（　　）

2　「伊勢物語」の文学形式を次から選び、記号を○で囲め。

ア　伝奇物語
イ　歌物語
ウ　軍記物語
エ　日記紀行文

演習①　**次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。**

九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に、夢のやうに見ない①て思ふ心地、世の中に又たぐひある事ともおぼえず。初瀬に鏡たてまつりしに、ふしまろび、泣きたる影の見えけむは、①これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は、来し方もなかりき。今ゆくすゑは、②あべいやうもなし。二十三日、はかなく雲煙になす夜、①去年の秋、いみじくしたて、かしづかれて、うちそひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上に、ゆゆしげなるものを着て、車のともに、泣く泣くあゆみ出でてゆくを、見いだして、思ひいづる心地、すべてたとへむ方なきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その②人や見にけむかし。

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、行ひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて、前のたび、②稲荷より賜ふしるしの杉よとて、投げ出でられしを、出でしままに稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ天照御神を念じ奉れと見ゆる夢は、③人の③御乳母して内わたりにあり、帝きさきの御蔭に隠るべきさまをのみ③夢解きも合せしかども。そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ、心に物のかなふ方なうてやみぬる④人なれば、功徳も作らずなどしてただよふ。

（更級日記）

〈注〉　わづらひ出でて――作者の夫、橘俊通が信濃守在任中、任地で病気にかかったこと。五十七歳。　初瀬に鏡たてまつり……――作者の二十六～二十八歳のころ、母が初瀬の観音に鏡を奉納し、夢占をさせたことをいっている。　はかなく雲煙になす――夫の屍を火葬にすることをいう。　ゆゆしげなるもの――見るから

に不吉なもの。喪服の上に袖のない白い衣服を着る風習があった。　夢解き――夢の吉凶を判断する人。

1　～～線①～③の読みを現代かなづかいで書け。

①（　　）　②（　　）

③（　　）

2　――線①「見ないて」、②「あべいやう」はそれぞれ音便化した語である。音便化していない原型を書け。

①〔　　〕　②〔　　〕

3　‖線①「これ」は具体的に何を指しているか。

〔　　〕

4　‖線②～④「人」とは、それぞれだれのことを指しているか。

②〔　　〕　③〔　　〕

④〔　　〕

5　――線③「夢解き」が占い合わせた内容の部分を、文章中から三十字で抜き出して書け。（句読点を含む）

演習②　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

おのれいと若かりける時、母刀自の前に古き人の書けるものどものあるが中に、かぐ山を「いにしへの、事はしらぬを、われみても、久しくなりぬ、あめの香具山」、子のもろこしへ行くをその母、「旅人の、やどりせむ野に、霜ふらば、吾子はぐくめ、あめの鶴群」、つまのいせのみゆきの大御供なるを、「ながらふる、つまふく風の寒き夜に、わがせの君は、ひとりかぬらむ」、つくしよりのぼるとき女に別るとて、「ますらをと、思へるわれや、水ぐきの、水城のうへに、涙のごはむ」、題しらず、「したにのみ、恋ふればくるし、紅の、末摘花の、色に出ぬべし」、ものがたり、「ある時は、ありのすさみに、語らはで、恋ひしきものと、別れてぞしる」、たび、「名ぐはしき、いなみの海の、おきつ波、千重にかくりぬ、やまとしまねは」「淡路の、野島が崎の、浜風に、妹がむすびし、ひもふきかへす」などいと多かり。こをうちよむに、刀自のたまへらく、近頃そこたちの手ならふとて、いひあへる歌どもは、わがえよまぬおろかさには、何ぞの心なるらむもわかぬに、此いにしへなるは、さこそとはしられて、心にもしみ、となふるにもやすらけく、みやびかに聞ゆるは、いかなるべきこととか聞きつやと。おのれもこの問はするにつけては、げにと思はずしもあらねど、くだれる世ながら、名高き人たちのひねり出し給へるなるからは、さるよしこそあらめと思ひて、もだしをる程に、父のさしのぞきて、①たれもさこそ思へ、いで物ならふ人は、いにしへにかへりつつ、まねぶぞと、かしこき人たちも、教へおかれつれなどぞありし。にはかに心ゆくとしもあらねど、うけたまはりぬとてさりにき、とてもかくても、②その道に入り給はざりけるけにやあらむなどおぼえて過ぎにたれど、さすがに親の言なれば、まして身まかり給ひては、ふみ見、歌よむごとに思ひ出られて、古きよろづのふみの心を、人にも問ひ、をぢなき心にも心をやりて見るに、おのづからいにしへこそとまことに思ひなりつつ、年月に③さるかたになむ、入りたちたれ、しかありて思へば、先にたちたるさかしら人にあどもはれて、遠く④わろき道にまどひつるかな。しらぬどちも、心静かにとめゆかば、なかなかによき道にもゆきなまし。歌よまぬ人こそ、なほきいにしへ歌と、くるしげなる後のをしも、わいだめぬるものなれと、今ぞまよはし神の、はなれたらむ心地しける。

（賀茂真淵「歌意考」）

〈注〉　ひとりかぬらむ――一人淋しくおやすみであろうか。　刀自のたまへらく――母上がおっしゃったことには。　をぢなき――つたない。

1　――線①「たれもさこそ思へ」の「さ」は具体的に何を指すか。

（　　）

2　――線②「その道に入り給はざりけるけにやあらむ」の「その」の指すところを明らかにしながら、傍線部を口語訳せよ。

（　　）

3　――線③「さるかた」は何を指しているか。文章中から五字以内で抜き出して書け。

□□□□□

4　――線④「わろき道」は、この場合は具体的に何を指しているか。

（　　）

第8講座 日記・紀行文の読解

⊙読解のポイント

日記文は、いうまでもなく筆者の内面の投影であり、自身の精神生活や人間としての心身の成長過程についての叙述が大半を占める。紀行文は、旅を扱ったものであるから、いわゆる5W1H（いつ、だれが、どこから・どこへ、何のために、どんなふうに）をいつも確認しておく。人との触れ合いも多く語られ、いろいろな人物が登場するから、動作の主体を正しくおさえる。どちらも、感情や情緒の高まるところや場面の転換点で、よく和歌が挿入されるので、その場に応じて、歌意を的確に汲み取ろう。

基本演習　**次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。**

かばかりねんごろにかたじけなき御心ざしを、見ず知らず心こはきさまにもてなすべき。ことごとはさしもあらずなど思へば、参りなむと思ひ立つ。①まめやかなることども言ふ人もあれど、耳にもたたず。心うき身なれば、［A］にまかせてあらむと思ふにも、この宮仕へ［B］にもあらず、いはほのなかこそすままほしけれ。又うきこともあらば、いかがせむ。いと心ならぬさまにこそ思ひ言はめ。なほかくてやすぎなまし。近くておやはらからの御ありさまも見きこえ、又昔のやうにも見ゆる人のうへをも見定めむと思ひ立ちにたれば、あいなし、参らむほどまでだに、びんなきことといかできこしめされじ。②近くてはさりとも御覧じてむと思ひて、すきごとせし人々の文をも、「なし」など言はせて、さらに返りごともせず。宮より御文あり。見れば、「さりともとたのみけるがをこなる」など、おほくのことどものたまはせで、「いざ知らず」とばかりあるに、胸うちつぶれて、あさましうおぼゆ。めづらかなるそらごとどもいとおほく出で来れど、さはれ、なからむことはいかがせむとおぼえて過ぐしつるを、③これはまめやかにのたまはせたれば、思ひ立つことさへほのききつる人もあべかめりつるを、をこなるめをも見るべかめるかなと思ふに悲しく、

基本確認演習

文学史

1　次の解説は、いずれも日本文学史上有名な作家についてのものである。それぞれの解説に該当する作家を、あとから一人ずつ選び、（　）に記号で答えよ。

A　京都の下加茂神社の神官の家に生まれ、和歌と音楽の道に精進した。そして、和歌の才能を認められて、後鳥羽上皇の和歌所に仕える身となって、歌壇でも大いに活躍した。しかし、後に出家、遁世して、蓮胤と名のった。（　　）

B　平安前期の歌人で、六歌仙の一人。美貌と和歌の才とをもって世に知られた。京都から東国に下った時に、隅田川の辺で、「名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の一首を詠んだという。『古今和歌集』の序で、その歌風を、「心余りて詞足らず」と評されている。（　　）

C　室町時代の初めに現れた能の天才で、父とともに、その芸を高めて、当時の代表的存在

御返りきこえむものともおぼえず。　（和泉式部日記）

〈注〉見ず知らず――見もしない知りもしないで。知らん顔をして。　ことごと――そのほかのこと。　さしもあらず――それほどでもない。　昔のやうにも見ゆる人のうへ――昔の夫のように思われる子供の行く末。　あいなし――つまらない。　すきごとせし――言い寄ってきた。　ほのききつる――いくらか耳にした。

1 □A・Bに入れるのに最も適当な語を、それぞれ次から選び、（　）に記号で答えよ。

ア 本意　**イ** 来世　**ウ** 宿世　**エ** 波　**オ** 昔
カ 我　**キ** 人　**ク** 別

A（　　）　B（　　）

2 ――線①「まめやかなることども言ふ人々」とは、どういう人々か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 細かいことばかり言い立てる人々　**イ** まじめな忠告をしてくれる人々
ウ 好色めいたことを言いかけて来る人々　**エ** 現実的なことばかり言う人々

3 ――線②「近くては」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア いろいろと取りざたする人たちの近くにいては
イ 親兄弟の近くに住んでいたなら
ウ 宮のおそば近くにお仕えすることになれば
エ 昔の姿に少しでも近づいたなら

4 ――線③「これ」は具体的には何を指すか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 宮　**イ** おやはらから　**ウ** 昔のやうにも見ゆる人
エ 御返りごと　**オ** 宮よりの文　**カ** そらごと

5 この文章を二つの段落に分けるとすると、どこで切るのが最も適当か。第二段落の始めの五字を書け。

となり、能の大成者として仰がれている。『花鏡』『至花道』などの、深遠な芸能論を述べた伝書の著者としても名高い。（　　）

D　近世後期の歌舞伎作者で、代表作に『東海道四谷怪談』がある。その徹底した、下層社会のリアルな描写と残酷な趣向とは、観客の喝采を博した。（　　）

E　歌人・医学博士。正岡子規の門から出た伊藤左千夫に師事して、万葉調の短歌を作り、特に、写生ということを力説して、生涯の作家活動の基本とした。近代を代表する歌人として認められている。（　　）

ア 若山牧水　**イ** 滝沢馬琴
ウ 在原業平　**エ** 世阿弥
オ 鴨長明　**カ** 鶴屋南北
キ 与謝蕪村　**ク** 小野小町
ケ 源実朝　**コ** 斎藤茂吉

2 次の作品名の読みを現代かなづかいで書け。

1 懐風藻（　　）
2 夜半の寝覚（　　）
3 十六夜日記（　　）
4 玉勝間（　　）
5 無名草子（　　）
6 世間胸算用（　　）

演習1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

廿一日、①卯の時ばかりに舟出だす。みな人々の舟出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろけの願によりてにやあらん、風も吹かず、よき日出で来て、漕ぎゆく。このあひだに、使はれむとてつきて来る童あり。それがうたふ舟歌

なほこそ国の方は見やらるれ　わが父母ありとしおもへば　かへらや

とうたふぞあはれなる。かくうたふを聞きつつ漕ぎ来るに、黒鳥といふ鳥、岩の上にあつまりをり。その岩のもとに、波白くうちよす。楫取のいふやう「黒鳥のもとに白き波をよす」とぞいふ。この言葉なにとにはなけれども、ものいふやうにぞ聞こえたる。②人のほどにあはねば、とがむるなり。かくいひつつゆくに、舟君なる人、波を見て、「国よりはじめて、海賊むくいせむといふなることをおもふ上に、海のまた恐ろしければ、かしらもみなしらけぬ。七十ぢ八十ぢは海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯べの白波といづれまされり沖つ島守

③楫取いへ」

（土佐日記）

〈注〉みな人々の舟――「みな」は「出づ」にかかるとみるのが通説。
楫取――船頭。　ものいふやうに――この「もの」は「興あること」の意。　沖つ島守――沖の島の番人。

1 この文章中には、光景を対照的に述べた部分が二か所（一つは二十五字以内、もう一つは十五字以内）ある。それぞれ初めと終わりの三字を抜き出して書け。（句読点は含まない）

①［　　］……［　　］

②［　　］……［　　］

2 ――線①「卯の時」とは、現在のだいたい何時ごろに当たるか。午前、午後の別を明らかにして答えよ。

［　　］

3 ――線②「人のほどにあはねば、とがむるなり」の内容として正しいものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 楫取のほかは人にも会わないので、なつかしい言葉として聞きとめるのである。

イ 楫取のような分際で生意気な文句を並べるので非難するのである。

ウ 楫取とは結局身分が合わないので、ものの言い方もとがめることになるのである。

エ 楫取という身分に不相応な言葉なので、妙に思って気にとめるのである。

4 ――線③「楫取いへ」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 楫取よ、沖つ島守に言ってくれ。

イ 楫取、すなわち沖つ島守よ、言ってくれ。

ウ 沖つ島守も楫取も言ってくれ。

エ 楫取よ、沖つ島守にかわって言ってくれ。

演習 2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

いとせめてあくがるる心催すにや、にはかに太秦に詣でむと思ひ立ちぬるも、かつうはいと怪しく、仏の御心の内恥づかしけれど、二葉より参り慣れにしかば、すぐれて頼もしき心地して、心づからの悩ましさも愁へ聞えむとにやあらむ、暫しは御前に。供なる人々、「時雨しぬべし。はや帰り給へ」など言へば、心にもあらず急ぎ出づるに、法金剛院の紅葉、この頃ぞ盛りと見えていとおもしろければ、過ぎがてにおりぬ。高欄のつまなる岩の上におりゐて、山のかたを見やれば、木々の紅葉色々に見えて、松に掛かれるつたの色も、ほかには異なる心地して、いと見所多かるに、憂き故里はいとど忘られぬるにや、とみにも立たれず。折りしも風さへ吹きて、もの騒がしくなりければ、見さするやうにて立つほど、

人しれず契りしなかの言の葉を嵐吹けとは思はざりしを

と思ひ続くるにも、すべて思ひ混ずることなき心の内ならむかし。

帰りてもいと苦しければ、うち休みたるほど、御文とてとり入れたるも、胸うち騒ぎて引き広げたれば、ただ今の空のあはれに日頃の怠りをとり添へて、こまやかに書きなされたる墨つき、筆の流れも、いと見所あれど、例のなかなかかき乱す心迷ひに、言の葉の続きも見えずなりぬれば、御返りもいかが聞えけむ、①名残もいと心細くて、この御文をつくづくと見るにも、日頃のつらさはみな忘られぬるも、②人わろき心のほどやとまたうち置かれて、

これやさは③問ふにつらさの数々に涙を添ふる水茎のあと

例の人しれず中道近き空にだに、たどたどしき夕闇に、④契り違へぬしるべばかりにて、尽きせず夢の心地するにも、出で聞えむかたなければ、ただ言ひしらぬ涙のみむせ返りたる。暁にもなりぬ。枕に近き鐘の音も、ただ今の命を限る心地して、我にもあらず起き別れにし袖の露、いとどかこちがましくて、「君や来し」とも思ひ分かれぬ中道に、例の頼もし人にてすべり出でぬるも、返す返す夢の心地なむしける。

（阿仏尼「うたたね」）

〈注〉 いとせめてあくがるる心――ひどく思いつめて上の空になった心。 いとどかこちがましくて――一層愚痴っぽくなって。 例の――いつもの。

1 ――線①は、何の「名残」か。具体的に説明せよ。

（　　）

2 ――線②「人わろき」を口語訳せよ。

（　　）

3 ――線③は、「忘れてもあるべきものをなかなかに問ふにつらさを思い出でつる」「吹く風も問ふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里」などと用いられる表現である。これを参考にして、文章中の「問ふにつらさ」を解釈せよ。

（　　）

4 ――線④「契り違へぬしるべばかりにて」の下には、どのような語句が省略されているか。簡単に口語で書け。

（　　）

解答《S高校古文Ⅱ》

第1講座　主語（動作主）をとらえる　P2〜5

基本演習　1①エ　②オ　④ア　⑥ウ　⑦ア　⑪イ　2③エ　⑤ウ　⑨ア　⑬イ　3ウ　4⑧オ　⑩イ　⑫エ

［解説］　1文章中の「殿」は道長、「この宮」は皇子（若宮）を指す。②には、敬語が用いられていない。⑥では、「たてまつり」と「たまへ」で、「しかけ」た人にも「しかけ」られた人にも敬意が表されている。⑪にも、敬語が用いられていない。　2⑬は筆者自身のことをいっている。

【口語訳】　（中宮は）十月十日過ぎまでも、御帳台からお出にならない。（女房たちは、その御帳台の）西側のすぐそばにある御座所に、夜も昼も控えている。殿が、夜中といわず暁といわず、お見えになっては、乳母のふところをお探しになって（若宮を）おのぞきになるのであるが、（乳母が）何の心づかいもなくうつらうつらしているときなどは、何の心の用心もなくねぼけていてはっと目をさましたりするのも、ほんとうに気の毒に思われる。

（若宮が）まだ何もおわかりにならないころなのに、（殿が）御自分だけは満足して（若宮を）高く抱き上げておかわいがりなさるのも、ごもっともで喜ばしい。あるときは（若宮が、殿におしっこをかけるという）とんでもないことをしかけ申し上げなさると、（殿は）直衣の紐をといて（お脱ぎになって）御几帳の後ろで火にあててお乾かしになる。（殿は）「ああ、この若宮のおしっこにぬれたのは、うれしいことだなあ。このぬれた着物を火であぶることは思いがかなったような気持ちがする」と、お喜びになる。

（一条天皇の）行幸の日が近づいたというので、お邸のうちを一段と手入れしてりっぱになさる。とても美しい根株のついた菊をあちらこちらさがしては掘り取って持参する。とりどりに色変わりした菊も、黄色で（今）見ごろな菊も、様々に植えこんである菊も、朝霧の晴れたときに見渡した眺めは、老いも退いてしまいそうな気持ちがするのは、どういうことだろうか。まして、（自分が）物思いをすることが少しでも普通の身であったならば、風流好みの態度を示し、若やいだ気分になって、無常の世を過ごしたであろうに。

基本確認演習　1 1やりみず　2きちょう　3そくたい　4くろうど　5つまど　6ほい　7さきもり　8じもく　9かんだちめ　10やぶさめ　2 1十一月　しもつき　2八月　はづき　3二月　きさらぎ　4六月　みなつき　5九月　ながつき　6一月　むつき　7十二月　しわす　3 1何かかけがあるのであろう　2しかたがない　3いいようがない　4どうしようもない

演習①　1Aエ　Bウ　Cア　Dキ　Eカ　2①イ　②オ　3①ア　②イ　③ウ　④イ

［解説］　『武道伝来記』は、全国に材を求め、特に仇討ちの精神を説いた話を収めている。

1西鶴独特の省略表現と、主語の頻繁な交替に注意する。特にDに注意。ここは、惣左衛門の家から逃げ出した与四兵衛が、隣の郷左衛門の家にかけこんで、そこの家来に仔細を語って頼んだところ、その者が主人の郷左衛門にその旨を伝えた、という文脈である。　2それぞれの人物についての説明、その言行を正しくとらえる。小見山惣左衛門は、「万に理屈がましく、武を高く振るひ、付け届けを第一に覚えたる男」と説明され、実際の行動では、家来の与四兵衛がしでかした誤ちに腹を立て、刀で切ろうとする。与四兵衛は、使いはまちがえる、意地は張る、主人に手向かう、体裁も何も考えない人物のようだ。岩平徳内については、使いの者の不審な口上・持参品にも慎重に対処している、ということぐらいしかわからない。深谷弥惣は、縁起でもない口上にいったんは腹を立てるが、事情がわかると、「かへつて気の毒に思ひ、この類の事おほし、かならず使ひの者は御免を蒙る」と言うような人物で、これは①にあたりそうである。里鐘郷左衛門は、逃げこんできた与四兵衛をかくまって、惣左衛門のもらい受け依頼を全く受けつけない人物である。これは②にあたりそうである。　3「べし」は、「…だろう」（推量）、「…う」「…よう」「…つもりだ」（意志）、「…べきだ」「なければならぬ」「…のがよい」（当然・適当）、「…できる」（可能）、「…せよ」「…であれ」（命令）などの意味がある。